

# 琉球大学学術リポジトリ

## [短報] サツマイモメイガの学名について

メタデータ	言語: 出版者: 沖縄農業研究会 公開日: 2009-01-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 東, 清二, Azuma, Seizi メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002015234">http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002015234</a>

## 短 報

### サツマイモノメイガの学名について

東 清 二

(琉球農業試験場)

サツマイモノメイガはサツマイモの害虫として1941年波照間島でその発生が確認され、その後八重山全島、多良間島、伊良部島、宮古島、沖縄本島、久米島、伊江島伊是名島など全琉的に分布するようになり、最近では与論島、奄美大島にも産するようになったが、従来その学名については *Omphisa illisalis* Walker を用いていた。筆者は1966年ハワイにおいてハワイ産の *O.anastomosalis* Guenee と琉球産のいわゆる *O.illisalis* Walker について Genitalia を比較検討した結果、全く同一であることがわかり、その事をイギリスの Infestation Laboratory でメイガ類を研究中の尊田望之氏(門司植物防疫所職員)に依頼し、British Museum の J. D. Bradlen の協力で標本等も検討していただいた結果、琉球産のサツマイモノメイガは次のように学名を改めるべきだと云うことがわかった。

*Omphisa anastomosalis* Guenee そして *O. illisalis* Walker は *anastomosalis* Guenee の junior synonym となるわけである。

なお筆者の調査した結果でも次のことがわかった。

1. Guenee (1854, In Boisduval et Guenee, Histoire Naturelle des Insectes. — Species General des Lepidopteres, 8:373) は Java 産をタイプ標本として *Pionea anastomosalis* を記載した。

2. Walker (1859, List of the Specimens of

Lepidopterous Insects in the Collection of the British Museum, 18:653) は Ceylon 産をタイプ標本として *Botys illisalis* を記載した。

3. Moore (1886, The Lepidoptera of Ceylon, 3: 3111) は Genus *Omphisa* を創設し、*anastomosalis* Guenee および *illisalis* Walker がそれに属するようになった。

4. Hampson は1896年, The Fauna of British India, Moths 4: 382に *anastomosalis* Gueneeをあげ *Botys illisalis* Walkerを同一種として取扱った。

5. その後 Caradja は 1925年, Ueber Chinas Pyraliden, Tortriciden, Tineiden Nebst Kurze Betrachtingen, zu Denea Das Studin Dieser Fauna Veranlassung gibt, Acanemia Romana Memoriile Sectiunii Stiin Tifice Serie III. Tomul III. Mem.7:355で *illisalis* Walker の産地は中国, 台湾, アッサム, シッキム, セイロン, ビルマ, アンダマスで, *anastomosalis* Guenee は別種のように取扱った。

6. Joannis (1928) は, Lepidopteres Heteroceres Du Tonkin, Societe Entomologique De Franceで, それら 2型の形態的特徴を述べたあと同一種か, または別種かも知れないとつけ加えている。

そこで今回 British Museum で調査した結果 Synonym であることがわかったので, 命名規約に従いがい, *Omphisa anastomosalis* Guenee が優先となるわけである。最後に尊田望之氏および J. D. Bradlen氏の御協力に対し厚くお礼申し上げる。